



「ヘレン・ケラー」に教えてもらったこと

中幡小学校 六年二組 飯室 富士子

「このお子さんの目は、もう見えなくなっています。それから耳も、もう聞こえません。」生まれてわずか十九か月で、ヘレンは視覚と聴覚を失いました。その二つを失うということとは、話すこともできなくなるのです。

私は四年生の時、学校の授業で視覚や聴覚に障害がある方について学びました。その時に、アイマスクをして学校の中を歩く体験をしました。階段の手すりを使ったり、さわりながら壁をたどったり、ペアの子の助けを借りて移動しました。最初はいつも使っている場所だから簡単だろう、と思っていたのですが、真っ暗で頭が混乱してきて、一体自分はどこを歩いているのか分からなくなっていました。私は見えなくなっただけでも不安になったのに、ヘレンは三重苦になったのです。音も光も無い真っ暗な世界の中で、どのように心を開いていったのかとても興味を持って読み進めました。

私は、ヘレンがサリバン先生と一緒に勉強を頑張った姿が心に残っています。サリバン先生は、実際に物をさわらせて文字を教えました。口をさわらせて発音を教えました。先生が手に文字を書く「指話」で文字を読むことは、先生が亡くなるまでずっと続けました。いくらヘレンがかしこい人で人一倍の努力家でも、心からヘレンを愛する気持ちで教えてく

れるサリバ先生がいなかったら、一人でたくさんのお苦しみを乗りこえることはできなかったと思います。私は自分で本も読めるし、字も書けるし、思った事を自由に話せます。だけど苦手な社会の歴史が覚えられなくて、くじけてしまいました。私があきらめるなんてはずかしい、そう思いました。

ヘレンはサリバ先生と人の三倍、四倍の努力をして、強い意志でハーバード大学を卒業しました。それから、同じように体が不自由な人を少しでも幸福にするために、助ける仕事をすることを決めました。障害がある人達が望んでいるのは、健常者と同じように教育を受けて、一人のりっぱな社会人として仕事をする事だ、とヘレンは分かっていました。

そのことをみんなに知ってもらうために、世界中で講演をしました。とても疲れたり、経済的に苦しいこともあったそうです。でもヘレンは、両親やサリバ先生、周りの人の助けがあったから苦しみを乗り越えてこれたことに感謝していました。今度は、自分が苦しみ悲しむ人たちの幸福のために働くことが使命だと考えました。

私も今までたくさんの人に助けられて、愛につつまれて育ちました。これから中学に入って、ヘレンに負けないくらい、たくさん勉強をします。今までは、どうして勉強をしなければならぬのか分かりませんでした。でも、将来だれかのために役に立つ人間になるには知識がなくてはいけないんだ、そのことをこの本でヘレンに教えてもらいました。